

# 翻刻・手錢記念館所蔵俳諧伝書（三）

## ― 手錢記念館所蔵俳諧資料（六） ―

伊藤 善隆<sup>a</sup>

<sup>a</sup> 湘北短期大学総合ビジネス学科

### 【キーワード】

俳諧 手錢季硯 手錢冠李 広瀬百羅 不識庵節山 『俳諧之伝系』  
『蕉門俳諧大意 ふもとの塵』 『俳諧十五篇』 「俳諧発句十六篇」  
「俳諧付句十四体」

### はじめに

本稿は、島根県出雲市大社町の手錢記念館に所蔵される俳諧資料の中から、不識庵節山著『俳諧之伝系』（写本一卷）、広瀬百羅著『蕉門俳諧大意 ふもとの塵』（写本一冊）、百花井宇鹿著『俳諧十五篇』（写本一冊）を翻刻紹介するものである。

手錢家は、貞享年間に大社に移り住んだ喜右衛門長光（寛文二年〔寛延二年〕を祖とする商家で、町役の大年寄を長く勤めた。歴代の当主は文芸にも関心を寄せ、和歌・漢詩・俳諧に熱心であった。

出雲俳壇といえ、去来の甥とされる水鶏坊空阿の伝授を受けた広瀬百羅（享保十八年？〔享和三年？〕の存在が注目される（大磯義雄『岡崎日記と研究』（未刊国文資料刊行会、昭和50年10月）、「高見本『岡崎日記』『元禄式』の出現と去来門人空阿・空阿門人百羅」（『連

歌俳諧研究』87、平成6年7月）参照）。広瀬家の系譜は、子の日々庵浦安、孫の蘭々舎茂竹と続き、手錢家の歴代、白澤園季硯（三代）、徳園人冠李（季硯弟）、敬慶（四代）、衝冠斎有秀（五代）とともに、大社の俳壇をリードした（両家には血縁関係もあった）。

本稿で翻刻する資料のうち、『俳諧之伝系』は、淡々系の俳人である不識庵節山が、岱青楼冠李（季硯弟）に与えた俳人の系譜で、冠李が節山に入門していたことを明確に示す資料として貴重である。また、『蕉門俳諧 ふもとの塵』は、著者名を明らかに記していないが、広瀬百羅の著作と推定され、大社の俳人たちが共有していたであろう俳諧観をうかがい知ることのできる資料として貴重である。さらに、『俳諧発句十五篇』は、宇鹿の編著として知られる「俳諧発句十六篇」「俳諧付句十四体」とほぼ同じ内容で、同書の流布を具体的に示す一伝本として貴重である。

### 〈凡例〉

翻刻にあたり、私に句読点を補い、改行は適宜改めた。濁点は原本の通りとし、異体字は概ね通行の字体にあらためたが、一部原本の表記を残した。また、「ㇿ」は、「より」とあらためた。

原本の各丁片面の終わりに当たるところに「をつけ、（ ）内」にその丁数および表・裏（オ・ウ）を示した。

誤記と思われる箇所も原文どおりに翻刻し、適宜その傍に「（マ）」を付した。虫損部分を推定で読んだ箇所は「（虫損）」と傍記した。また、難読の箇所は□で示した。書き損じを直してある箇所は、直した方を本文として示し、いちいち注記をしなかった。

参考のため、原本の図版を最後に示した。

# 一、『誹諧之伝系』

## 〈解題〉

本書は、「はじめに」で触れたとおり、淡々系の不識庵節山が、岱青楼冠李（季硯弟）に与えた系譜である。現在はマクリの状態だが、本来は卷子本に仕立てられていたと推測される。本紙の縦皺が、その推測の裏付けとなろう。

これまでの研究では、百羅が去来の伝を出雲に持ち帰る以前の大社の俳人たちの動向について、知られることはほとんど無かった。しかし、近年の調査の結果、手銭記念館に所蔵される『誹要辨』『俳諧すがた見』の両書によって、元文四年の夏から秋頃に、節山が大社に滞在して、地元の俳人たちに俳諧を教えていたことが明らかに なった（『手銭家資料を活用した江戸時代の出雲文化の発掘と再生事業』公益財団法人手銭記念館、平成27年3月、および本誌三十五号・三十六号所収拙稿参照）。さらに、昨年、手銭記念館学芸員の佐々木杏里氏によって、手銭家御所蔵の資料の中から本書が発見された。これは、冠李と節山が師弟関係にあったことを明確に示す資料として大変貴重である。

宗匠が系譜の類を弟子に与えることは、諸系統の俳人たちにしばしば類例がある。内容は概ね本書と同様のものだが、系統により名称や形式に多少の違いがある。たとえば、「誹諧相伝系統」や「誹諧相承血脈」などという名称のものがあつたり、系譜を示した後に加える句や文もそれぞれであつたりする。

管見の限りではあるが、淡々が弟子に与えていた系譜は、「誹諧之伝系」という名称で、系譜を示した後に、俳号の文字を詠み込んだ五言対聯と発句を添える形を取る。まさに、本書も、その特徴が淡々のものと一致することが興味深い。なお、系譜に添えられた発

句の「正すへし道の冠」とは、諺の「李下に冠を正さず」を踏まえた表現で、冠李の「李」を暗示するのだろう。

## 〈書誌〉

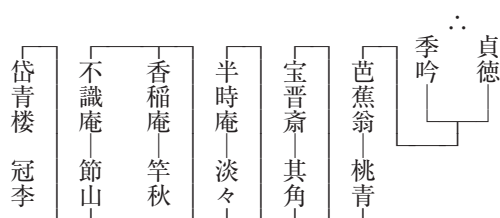
書型……写本（節山自筆）。一枚（もとは卷子本か）。一八・八糎×九三・八糎（紙継ぎなし）。

字高……一三・〇糎（△誹諧之伝系」を計測）、一六・五糎（なを向上の一路に遊んで」を計測）。

備考……「△」「∴」と系譜を示す線、および訓点は朱筆で記されている。

## 〈翻刻〉

△誹諧之伝系



浮雲連<sup>二</sup>海岱<sup>一</sup>

平野入<sup>二</sup>青徐<sup>一</sup>

正すへし道の冠青あらし

なを向上の一路に遊んで、濁底の筆妙を得たまへ。

不識庵

元文四年<sup>己未</sup> 「花押」

五月十四日

門生

冠李丈

## 二、『蕉門俳諧大意 ふもとの塵』

### 〈解題〉

署名はないが、広瀬百羅の著作と推定される伝書である。すなわち、本文中に「伝書の事は、二条家の歌道に、三重之御伝授あり。俳諧も、又和歌の一体より出たれば、ひそかに三重の伝法を立て、修行の次第をしる事也。初重、二重、三重を経て、俳諧之奥秘、皆伝也」（二丁裏～二丁表）とあるが、この「初重、二重、三重」の「初重」とは、百羅の著作である『極秘俳諧初重伝』を指すと考えられるからである。

『極秘俳諧初重伝』は、巻一のみが手銭記念館に伝存しており、すでに本誌三十五に翻刻した。翻刻した際には、著者を明らかにできなかったが、その後、大社町教育委員会が主催した百羅の顕彰展

（昭和37年11月3日～5日、大社町公民館）の冊子（『広瀬百羅顕彰展記念誌』）に記載された展示資料リストの中に、「俳諧初重伝一、二、三、俳諧正風伝四、四冊 百羅翁の自筆著書」とあるのを確認することができた。

とすれば、ここで「ひそかに三重の伝法を立て」と言っている著者は、つまり『極秘俳諧初重伝』の著者と同一人物、すなわち百羅であると推定できよう（なお、『初重伝』の巻二・三、そして『二重伝』『三重伝』の伝存は、現在のところ不明である）。

また、やはり本文中に見える「他門に対して、一言も論すへからず」（二丁ウ）や「他門に対して論すへからず」（巻末）という文言は、『極秘俳諧初重伝』に「他門ニ洩サヌ様ニシテ、随分大切ニ致ス事」（巻末）とあったり、『蕉門発句十五味』（本誌三十五号に翻刻）に「必他門に漏脱あるへからず」（巻頭）、「他門に対して論すへからず」（巻末）とあったりするように、百羅の伝書に特徴的な表現である。また、いずれも、とくに美濃派に批判的である。このことも、本書を百羅の著作であるとする傍証になる。

さて、本書が百羅の著作であるとなると、つぎに注目されるのは「先師（芭蕉）は元禄七年の僊化にして、<sup>予は</sup>享保十八年の生なれば、年歴を隔つる事、既に三十八年也」（二丁裏）という記述である。というのは、百羅の生没年は、これまでも諸説あるからである（なお、享保十八年は元禄七年の三十九年後だから、「隔つる事、既に三十八年也」とは、文字通り「隔」てた年数を言っていることが分かる）。以下、簡単に諸説を列挙してみよう。

①享保十六年生、享和三年没、七十二歳説：『広瀬百羅顕彰展記念誌』。ただし、この数字には矛盾があつて、生年が正しいとすると、享和二年没となる。

②享和三年没、七十一歳説：桑原視草『出雲俳壇の人々』（だるま

堂書店、昭和56年8月)に『雲陽人物誌』を引用して「享和三の七月廿四日齡算七十一にて卒ス」とある。また、同じく同書に「北広家の家系帳」を引用して「享和癸亥(三年)七月廿四日七十一才卒す」とある。ということは、享保十八年の生まれである。

③享和二年没、七十一歳説…山崎真克『椎の本花叔編『雲陽人物誌』翻刻』(私家版、平成25年9月)は、島根県立図書館蔵本を底本とするが、「享和二戌七月廿四日齡算七十一ニテ卒す」とあって、前掲桑原氏所引の『雲陽人物誌』と没年が異なる。これによれば、享保十七年の生まれということになる。

④享保十年生、七十一歳没説…百羅の追善集『あきのせみ』(文化二年跋)に載る「枕言葉」(衝冠斎有秀)には「古翁(芭蕉)は元禄七年の迂化、師(百羅)は享保十年の生れなれば年暦四十四年を隔つ」とあり、同じく「蓑笠翁終焉之記」(松茂亭露磨)には「七十一歳」で亡くなったと記される。しかし、この数字には矛盾がある。元禄七年から四十五年後は元文四年であって、享保十年ではない。元禄七年から享保十年は三十一年後だから、「三十年を隔つ」とあるべきである。なお、仮に、享保十年生で七十一歳没だとすると没年は寛政七年。元文四年生で七十一歳没だとすると没年は文化六年になる(『あきのせみ』は『山陰研究』第七号に翻刻)。

以上のうち、生年が本書と一致するのは②である。本書には(当然ながら)没年に関する記載がなく、ただちに②が正しいとするのは躊躇されるが、百羅自身が享保十八年の生まれであると記している点は、今後この問題を検討する上で貴重な情報となろう。

# 〈書誌〉

書型……写本。大本一冊。

表紙……砥粉色地花紋散らし。縦二五・九厘×横一八・一厘。

題簽……左肩無辺、模様入り料紙(上方は青緑色、下方は黄色で刷る)。「蕉門誹諧大意ふもとの塵 全」と墨書。

見返し……白紙。

本文……每半葉六行二十三字内外。

字高……二・一〇厘(本文一行目「粵に…ふた、ひ」を計測)。

丁数……全二四丁(墨付き二二丁)。

奥書……年記「安永六丁酉歲仲春十二日」。

備考……「○」印は、書いたものではなく捺したものである(筆軸の後端か何かで捺したものと思われる)。

# 〈翻刻〉

蕉門誹諧大意 ふもとの塵 全

(白紙)

「(表紙、題簽)

「(見返し)

(白紙)

「(墨丁紙)

粵に蕉門の学友こゝろさしをひとつにして、ふた、ひ二見の文台をひらき、此道すきやうあらんことを庶幾せらるゝにまかせ、ことしきさらきの中の二日、先師芭蕉翁の影前に香花をさ、けて、をの／＼上達の冥助を仰ぐ。千里の道も一歩よりはしまり、万仞の山も一塵よりなれるを、いまた一簣をなさすしてやむは、我やむなりといへり。道にしのきて名なきものは「(オ)庸夫に等しく、法にすゝみて名あるものは古賢にはちす。されは、後葉に名を残すを人間の本意とす。たま／＼後の世にしらるゝものは唯和歌の人のみなりといへれと、宗祇、宗長は連歌に名を残し、貞室、芭



蕉は俳諧に名を残せり。我輩のおろかなるも、常にひしりの教誡を守りて、心に昼夜を捨たるものは、筑波の雫もつもりては測となり、濫觴の流れも終に底なしとききは、なとか一句の玄妙なからざらんと、ひそかに」(一)同志を励まして、今や家法の廿五條を記し、次に教誡五十箇條を附録して、同調修行の階梯となす。他門にむかひて異論すへからず。

○蕉門におゐては、芭蕉翁の道法を守り、其正風をつとむるによりて、是を先師と称する事也。かるかゆへに、我家におゐては、何々の流といはすして、唯蕉門とのみ称する法なれば、我ともからは、皆翁の弟子と心得て、万世までも蕉門といふ事、自門の通称と定むへし。ある人の曰、はせをと」(二)吾子とは同時の人にあらず。然るに、是を先師と称するは、偽にして正道ならずといへり。予答て曰、先師は元禄七年の僊化にして、<sup>予は</sup>享保十八年の生なれば、年歴を隔つる事、既に三十八年也。しかれども、其道を学ひ、其法を守り、其風をしたふゆへに、我師匠と尊むへきは此翁より外にはなし。いとおほけなき事なれども、其古例を尋ぬるに、人麿公と貫之公は、年歴百六十年を隔つれども、貫之公の書給へる古今の序に、先師柿本の大夫とあり。是、先師と書へきの」(三)證明也。されは、先師の俳諧は、万古不易の正風なれば、千載の後までも、此風義に習ふへき也。今、世上の俳諧も、多くは芭蕉の末なれども、其時〳〵の宗匠の流行変風に習ふかゆへに、其角、支考、野坡などいへる流々の名目おこりて、〴しやれ〴化鳥〴いやみ、とて世にさま〳〵のうき名あり。蕉門におゐていむ事の第一也。

○蕉門の俳諧は、正風体也。正風といふは、其もと歌道の名目也。されは、先師の俳諧は、貞徳前後の変風をはなれて、」(四)ふた、ひ歌道の俳諧をおこし給へり。ゆへに、和歌の正風、俳諧の正風、

其もとひとつ也。世に正風の俳諧といふは、先師のはしめておこされたるやうに心得たる人あれども、左にあらず。世の変風あらためて、古代の正風に立直し給へり。たとへは、頓阿法師出て和歌の変風をふた、ひ正風に戻されしと同し事なり。ゆへに、芭蕉は、正風俳諧の元祖にはあらず。仏家にいはゆる中興開山の類也。されは、正風体といふは、歌道より出て、尤ふかき習ひある事也。今時世上の俳諧師、口に正風と」(五)いへとも、正風にあらず。実に正風の本意をしれる人は、稀なるへし。此ころも、美濃派の点者とも、自古を正風の俳人と名乗れとも、あるひは六部宿、あるひは千松嶋などのたくひ、正風にそむきたる句多し。是等は、実に正風をしらぬゆへ也。又、此ころの人の心には、正風の句といふは、唯よく人の耳に通して、ひとへに安らかなる句をいふと思へり。夫は地句といふ物にてこそあれ、正風体といふ物にはあらず。又、ある人の心得には、物につくろひなく、飴りなく、唯ありのまゝなる」(六)事をいふ物と心得て、門人の花見に行時のなむけに、〴まつそ〳〵吉野の花に長居すな、といふ句を送れり。是、少もつくろひなく、かさりなく、ありのまゝなる所か、正風のむねなりとて、門人こそりてもてはやせり。然るに、ある人、是を難す。彼人、もし富士の雪見に行時ならば、〴まつそ〳〵富士の雪見て長居すな、ともいはんか。又、上京の饞別ならは、〴まつそ〳〵都の花に長居すな、などもあるへし。かやうなるは、誠の正風とはいふへからず。先師の口伝に、法楽画賛の句法あり。定家の賛を西行にも」(七)用ひ、西行の賛を定家にも用ゆる様なるは、甚つたなき事也と見えたり。饞別の句とても、此心也。吉野を富士に替、富士を都に替て、諸方の間に合する様なるは、すへて初学<sup>（虫起）</sup>の句作にして、功者の句とはいふへからず。正風は唯自然の句かよしとて、文華のかさりもなく、ありのまゝな

る事のみをいふは、却て偏見変風也。此事、愚問賢註に明弁あり。正風変風の義論、是につゝ、まる也。先師誹諧の正風も、此外にはあらず。然に、誹諧の正風といふは、芭蕉一人の(オ五)正風にて、歌道の正風とは格別の事なりと、誹諧一分の我意をたつる輩は、蕉門の人とはいふへからず。或は、誹諧師はつくるはぬかよしとて我侶氣随なる放逸風を好み、事そけたる様をのみよしと思へる狂客の類、世に多し。是、偏に邪師にしたかふゆへに、終には異風者となる事也。正風の本意は、左にあらず。先師の行状を伝へきくに、礼義正しく言語うつくしく、貞固正直をむねとして、物のあはれはふかく、己を高ふらず、人を侮とらず、温潤にして、柔和なりし道者也。(ウ五)かるかゆへに、蕉門の学者は、句作は勿論、平日の行様も、すべて先師の徳行に習ひて、文句も言語もしほりある様に、今日をつゝしむ事、專要也。

○誹諧といへは、猥に俗語をいひちらす物の様に心得たる人あり。他門異風の教はしらす、正風の句作には、求て用ゆる事を好まず。但、一向捨るにはあらず。俗語を選むといふ口伝あり。此撰むといふ事、たやすからず。功成の後、自然に悟入すへき也。先師に、たまゝ、ゝのつと、ゝどんみりと、ゝ見せうぞ、ゝせうもの、ゝへばり(オ六)つき、などの俗語あれとも、格別の事にて、是等は一代に一句也。たとへは、和歌にゝてこらさといへる詞あり。古言なれとも、よき詞にあらず。近代にては、後西院御製に一首あり。又、後水尾院御製に一首ありて、をのゝ御一代のうちに二首とはなし。先師のへばりつきも、誹諧におゐて一代一句也。又、俗談平話をあつかふといひ、俗中に居て俗を正すといへるは、猶ふかくゆへある事也。猥に俗語を好む事にはあらず。

○正風の誹諧は、今の世にいひちらすこと(オ六)き雑口(オ六)の歌には(オ六)あらず。其もと和歌の一体より出たれば、心は向上の一路に遊び、

句作にしほりを用る事、即先師の口伝にして、是正風の眼目也。○発句の位を定むる事、先師唐崎の句を以て万代不易の鏡とす。是、発句の正位にして、此句一字も俗語なし。しかれとも、和歌にあらず、連歌にあらず、全誹諧の姿情也。先師も、奥羽行脚以前は、いまた誹諧の体定まらず。しかるを、此行脚のうちに工夫して、はしめて正風の眼を(オ七)ひらき、誹諧の本体を定め給へるむね、くはしく落柿舎の遺稿に見えたり。発句はいつれの発句にても、百韻の巻頭にたつ物にて、君主大将の位也。求めて俗語を好むましき事、此句を以て覚語(オ八)すへし。但、此前に、俗語俗事の差別あり。俗事は、尤誹諧の領也。俗語を用ゆる事にはあらず。

○今世間にはやる俳風は、全先師の風にあらず。美濃一流の新風也。専俗語を用ゆる流義にて、詞にひとつ物(ウ七)すきをいひ出して、世にはやり物とせり。是、其国其所の流行也。句調一癖ありておかしきゆへ、当世行過の人氣にかなふと見えたり。是、流行の変風也。すべて流行といふは、一時のはやり物也。しかし、此流義の教ゆる所は、俗を正すの正風にはあらず。人氣を伺ふはやり詞にて、渡世のためにはよき流義なり。しかれとも、またく実雅のおもむきにはあらず。渡世のために世を誣る人は、とかくして人氣にあはする也。人氣にあはせされは、今日の利用(オ八)な(オ八)し(オ八)さるかゆへに、俗に浮世俳諧といひ、又はいかいの商人といへるは、此類也。

○誹諧は、言語の遊び也。他の句を聞て、あしき句なりとも、難し譏り笑ふへからず。いと面白くうけ給はると、時宜よくあしらひたるか、正風家の礼讓也。誹諧は、人和の媒となす物なれば、時宜を失なはぬ心得第一なり。初学の輩、やゝもすれば、句の善悪を論し、鬭争に及ぶ事あり。是等は、人和の媒にはあらで、喧嘩の(ウ八)媒となる事なれば、ふかくつゝしむ守るへき事也。さ

るを、近年、あつまのかたには、俳諧にて絶交せし人あまたあるよし。是等は、無風雅第一の人といふべき也。

○他門には、我俳諧を自慢する人多し。蕉門には、自慢する事かたくいましめ也。いつも己を未熟なりと心得、いさ、かも物知顔をせずして、卑下謙退の心第一也。此道の上手といふは、先師一人にて、此余は皆々下手未熟也。許六、支考の輩、大に我身を慢して、人もなけなる大言を吐捨たれとも、<sup>（オ九）</sup>発句を十句もてる人なし。是、未熟にして、下手なるかゆへ也。先師はふかく是をつ、しみて、座右に唇寒しの制誨あり。人の何事にても問奉れば、信切にいひさとされ、問はぬ弟子には、一言も此道の事仰られず。又、他門の句を難し給はず。一とせ、山路の堇の句を北村湖春が難したるを聞給ふ時も、唯いかにもとはかりにて、更に何事も仰られずと也。

○俳諧入学のしめは、点取などしてなくさむ物なれとも、<sup>（ウ九）</sup>本意はなくさみ物にあらず。自己をいましむるか正道也。能々をのれをいましめて、正風のむねを修し得たる人の句は、自然と世上に押うつりて、他をも諷諭するに至るへしと也。先師の句、すべて自己箴なれとも、是を受用する時は、世人すへての教誡になるかことし。

○世間に、他流の俳人は、歌道をそしり、連歌をあなとり、本を忘れて我意をたつる癖あり。先師の教は、左にあらず。此道、もと歌道より出たり。世に宗匠たらんもの、<sup>（オ一〇）</sup>和歌連歌をしらすんはあるへからず。先師は、季吟師の門弟として、和歌も連歌も知給へり。されはにや、杜律五言、山家集を、常にふところにし給へりとぞ。すへていつれの道も、其もとを忘れざるを本意とす。

○蕉門に三修といふ事あり。第一発句、第二附句、第三文章也。此三つに通達したるを、世に宗匠と称する法也。ひとつかけても、

宗匠とはいふへからず。

○俳諧を修学するものは、是を第一の勤学として、万事<sup>（ウ一〇）</sup>は是を以ておさむへし。他学のちからを頼むには及はず。但、宗匠たらんものは、神儒仏の道の事も、おほむねをしらすんはあるへからず。是、唯我俳諧弘学のために、其大むねを知るまで也。一向にしらすしては、句作、或は文章等に望みて、不自由なる事多からん。先師の句作文章を見よ。古詩、古歌、古事の類を引用せるもの多し。唯、ある法師のことく、句は、どふあらふ、かふあらふ、とのみをあつかひ、文は、引板のどんぐりと、鳴子のがらくと、などいへる卑俗の野語を俳諧と<sup>（オ一一）</sup>心得て、一生をあやまつものは、我蕉門の人にてはあるへからず。

○蕉門俳集七部の書は、いつも用ゆへしといへとも、ことに猿蓑二集のうちにて、不易の体をもて鏡とす。又、文章の本体は、先師の文体を学ふ也。許六、支考の文体は、ゆめ／＼是を習ふへからず。

○伝書の事は、二条家の歌道に、三重之御伝授あり。俳諧も、又和歌の一体より出たれば、ひそかに三重の伝法を立て、修行の次第をしる事也。初重、二重、三重を<sup>（ウ一二）</sup>経て、俳諧之奥秘、皆伝也。

○修行の連衆を、雪月花の三段にわけて指南すへし。雪／友一連は、初学の人也。月／友一連は、未熟の人也。花／友一連は、已達の人也。雪／友にて、執心ふかく、殊に怠慢なく出精の輩は、時の宗匠の目利にて、月／友に加入すへし。是、初学の昇進也。猶、月／友にて、いやましに執心ふかく、道を成就すべき器量ある人は、是亦、宗匠の目かねを以て、初重、二重を相伝して、其後花／友に加入する事を<sup>（オ一二）</sup>ゆるし、三重を伝へ、点式をあたへ、文台授けて、宗匠となすへき也。是、俳諧<sup>（オ一三）</sup>成就也。奥秘伝授の

人なり。文台、点式をさつくるは、即、蕉門誹道の許可也。此時に至て、誹諧を我物とすへき也。他門に對して、一言も論すへからず。

○蕉門直旨の人の述作は、皆一通見るへき也。支考か十論、古今抄も、一編は見るへき事也。しかれども、皆卷龜鑑とするにたらず。すへて門人の書には偽説多ければ、其心得<sup>(二二)</sup>を以て見るへし。其角、去来、支考などは、即、我為の先哲なれども、いつれの門下にも一定せず、<sup>予は</sup>唯、芭蕉の教を守り、道をつとめ、風をうつさんとするの外、他念なきゆへ、其角にもよらず、支考にもよらず、さりとして無下に捨るにもあらず。取へきはとり、すつへきはすつ。用捨は、学者の眼力によるへき也。

○和歌には実名を用ひ、誹諧には風流を好<sup>ミ</sup>て別号を用ゆる例也。されは、和歌とおなじく、短冊に書し奉納法楽は、神明にさ、け、高位の人にも奉る名なれば、尤もおろ<sup>(二三)</sup>。そかにすへからず。又、名句を得ては其名千里にひ、き、後世にも残り、長く貴人の見聞にもふる、事なれば、たゞの名よりもおもき時あるへし。必、風名を汚すへからず。是、蕉門ひとつのつ、しみ也。

○誹諧の句は、よしもなき所にて、我しり顔に乱りにいひすて、かき捨る物にあらず。一句とても大切なれば、所を撰み、時を考へ、つ、しみて出すへき事也。先師の教に、句は遺言とおもふへしとあり。大切にせよとのいましめ也。<sup>(二四)</sup>

○句は、杉原以上に書法也。中折、はな紙などには、かたく書ましき也。神仏に奉るは勿論、人に贈る句などを麁紙にかくは無礼也。書法も正しく書へき也。又、宮寺の柱などに書つくる事、法外也。○人にあいさつの句、詞書など仕様習あり。又、書法にも習ひあり。かねて習をくへし。名は、詞書と句との中道に、低く書へし。上の字かくは、君父師匠まで也。其外は、書に及はず。又、草の字、

拝の字なとかく人あり。よからず。又、名を詞書と<sup>(二五)</sup>。句との間に書て出せは、向ふの人に脇を望む様にて無礼なれば、名は句よりも奥に書へし、と教へたる人あり。作法をしらぬ人の、自己の了簡にていふ事也。用ゆへからず。あいさつの発句あれば、脇はする物にきはまれる法也。若、ゆへありて脇をすましき人は、其断を申述るにてすむ事也。此方より脇には及び侍らすと辞退の心にて名を奥に書侍るといふは、あまり入外なる沙汰也。蕉門には用ゆへからず。

○花紅葉などに短冊つくる事、其時の時宜による也。みたりに<sup>(二六)</sup>。我は顔してつくる物にあらず。所望再三に及は、是非なく求めにも応ずへし。短冊は、右のかたの下枝に、随分低く附る物也。

○発句は、第一よく聞ゆるを本意とす。名人達人の句に至りては、たやすく聞へぬ句多し。是は、其句の聞へぬにはあらず。よく聞へたる句なれども、聞人未熟にして、たけ及ばざるゆへ、得聞あかす事なりかたき也。然るに、初心の人、己か耳に聞へざる句は、あしき句なりと難しそしれり。大なる僻事也。名人上手の句に至りては、己か耳に聞へざる句は、いかさまふかき<sup>(二七)</sup>。ゆへあらんと、年月に工夫をめぐらし、何とそ解し得ん事を思ふへし。聞とらざるは、其人の恥也。達人功者のしたる句に、聞へぬといふは一句もなし。却て下手のしたる句に、聞へぬ句あるもの也。先師の句々、撰集に出たるは皆よき句也。しかるに一句も聞へず。我、若年より心をとめて、三十年來精力をつくし、今半百にして漸くその玄妙を聞事を得たるのみ。但、先師の句を解する事、今は一家の秘訓なれば、不信の人には許すましき也。<sup>(二八)</sup>

○附句体品名目の事、さまざまありて一樣ならず。先師の教に、発句の体は、昔より様々かはりあれども、附句は三変也。古代は附物を以て附る事を専とす。今の連歌の附方のことし。又、中頃



は附物にかまはず、唯心附といふを専とすれども、今は移、<sup>ウツリ</sup>響、<sup>ヒビキ</sup>位、の四つを以て附るをよしとす、との給へり。其後、大津に閑居の時、千那法師の願によりて、附方十七ヶ條を書出し、是を以てしはらく大津の連衆を教へ給へり。しかれども、後くに至り、芭蕉か附方は是に限りたりと、諸人の迷ひ<sup>（オ一六）</sup>ならん事をおほしめして、終に是を取返して破り捨給ふと也。ゆへに、其書は世に残らされども、其名目は門人の心に残りて、おのく口つからに語り伝ふるゆへ、彼名目のうち、今も残れるあり。先師僊化の後、嵯峨の旅人去来、長崎にて門人の願ひによりて、附方十四体といふ物を書れたるも、彼十七ヶ條の名目を本として書れたるよし。此うちに、<sup>（ウ一六）</sup>面影附、<sup>（ウ一七）</sup>観相附、<sup>（ウ一八）</sup>其人附、<sup>（ウ一九）</sup>其場附、等の名目出たり。又、此後に、美濃の支考、附方に八体を立て、門人を教へたる時も、<sup>（ウ二〇）</sup>其人附、<sup>（ウ二一）</sup>其場附<sup>（ウ二二）</sup>、其天相、其時節、其面影、其観相、其時分、其時宜と、八体につゝめたる名目は、是亦先師の十七ヶ條より拾ひ出せる名目也。又、長崎の宇鹿、門人のために附方二十一体といふ物を書たる時も、面影、観相、其人、其場の四名目を出せるものは、即先師の十七ヶ條と、去来の十四体より取出せる名目也。彼本来の十七ヶ條は、今の世に伝はらすといへども、其名目の残れる事、かくのことし。されは、蕉門の附方は、此名目を本として、千変万化すへき事也。<sup>（オ一七）</sup>

○発句切字の事、脇、第三留<sup>トリ</sup>りの事、<sup>（オ一八）</sup>百韻法格の事、差合去嫌の事、古式新式の差別あれども、先初学の稽古には古式の旨を習練して、其後新式相伝を受へき也。

○附句の句体は、続猿蓑の風に習ふへし。但、世間の誹風は、いろくゝに流行して、続猿蓑の風などは、今は古めかしき様にいふ人あれども、あなち時の流行を好むへからず。唯、先師の不易体をうつすへき也。先師僊化の時、膳所の正秀、歎して曰、是よ

り後も、定めて流行の新風あらん。しかれども、<sup>（ウ一七）</sup>我等におゐては、其新風、さらく望みなし。唯いつまでも不易の体を楽まんのみ、といへり。此詞、肝心也。又、先師迂化の後、今日庵素堂上洛して去来に對して曰、蕉翁の誹風、今、天下にみちくたれども、漸又変すへき時至れり。吾子、志あらは、我も共に吟会して、一つの新風を興すへし、といへり。去来答て曰、先生の詞、ふかくかたしけなし。今、幸に先生をうしろたてとして、二三の新風を興さは、おそらくは「たひ天下の誹人をおとろかさ。しかれども、世波老波日々うちよせて、」<sup>（ウ一八）</sup>今は風雅に遊ぶへきいとまなければ、いとくちおしく思ひ奉るのみ、と答て新風の事同意なかりしむね、即落柿舎の遺稿に見えたり。素堂は先師の旧友にて、尤博覧賢才の人也。翁と共に誹名世に高し。しかれども、翁迂化の後、誹風甚我俤になりて、終には変風異端に落られしと見へたり。翁迂化より十五年後、宝永己丑のとしに、茶の羽織の弁をかきて、奥に、颯となりぬへら也茶の羽織、といへる句あり。是等定めて新風なるへけれど、おかしからず。<sup>（ウ一九）</sup>

#### 句作二十五教

- 風体たけ高く幽玄なる句をよしとす。
- 心詞ともにしほりある句をよしとす。
- 道理よく聞へて安らかなる句をよしとす。
- 風体正しき句をよしとす。
- 心を残して余情ある句をよしとす。
- 詞を残して余馨ある句をよしとす。
- 古詩、古歌、古事、古語等、拠ある句をよしとす。
- 卑下謙退なる句をよしとす。



○礼讓正しき句をよしとす。

○詞はなやかなるは、心のさひしきをよしとす。

○心はなやかなるは、詞のさひしきをよしとす。

○趣向新しき句をよしとす。

○清くいさきよき句をよしとす。

○たしかなる句をよしとす。

○厚き句をよしとす。

○しつかにおとなしき句をよしとす。

○やはらかなる句をよしとす。

○つよき句をよしとす。

○ほとけて軽き句をよしとす。

○あはれみふかき句をよしとす。

○風情面白き句をよしとす。

○忠心孝心なる句をよしとす。

○景気おもしろき句をよしとす。

○感心ふかき句をよしとす。

○向上にして諷諫の意味ある句をよしとす。

句作二十五誠

○卑俗の詞ある句を惡しとす。

○卑俗の心ある句を惡しとす。

○鈍き句を惡しとす。

○弱き句を惡しとす。

○おもき句をあししとす。

○薄き句をあし、とす。

○したゝるき句をあししとす。

○しふりたる句を惡しとす。

「(一〇二)ウ

「(一〇二)オ

「(一〇九)ウ

○かたき句をあししとす。

○さはかしき句を惡しとす。

○理屈かましき句を惡しとす。

○こはくおそろしけなる句をあし、とす。

○いひ過たる句をあし、とす。又、いひつめたる句。

○政事乱世の句をあし、とす。但、発句は眼前をはなれざるゆへ也。

○附句は千變万化して眼前をはなれ、古代の面影をも移す物なれば、くるしからず。

○礼を失ひたる句をあししとす。

○不義、不仁、不孝、不慈なる句を惡しとす。

○天変地妖の句、是亦発句には惡しとす。附合には「(一〇二)くるしからず。

○人体不具の沙汰、惡しとす。

○世間にあたりて平懷なる句を惡しとす。

○火事、盗人、葬礼などの句、あし、とす。

○病氣の句、惡しとす。但、おこり、頭痛、疝氣などの如きものはくるしからず。

○我めきたる句を惡しとす。

○例もなき新造の詞あるを惡しとす。

○入過てむつかしき句を惡しとす。

○おとけ過たる句をあし、とす。

「(一〇三)オ

右、すべて七十五條は、蕉門誹諧自己箴のため也。またく吟蹟のみにあらず。今日の行状を、此句法に習練すへし。是、先賢教誡のおもむきにして、秘藏の事。他門に対して論すへからず。

安永六丁酉歲仲春十二日

「(一〇三)ウ

（白紙）

（白紙）

（裏表紙）

「（遊丁紙）  
（裏表紙）  
（見返し）」

### 三、『俳諧十五篇』

#### 〈解題〉

本書は、題簽に「俳諧十五篇」とあるが、前半は長崎の俳人百  
花井宇鹿の著「俳諧発句十六篇」、後半は同じく宇鹿の著「俳諧付  
句十四体」を併せて写したものである。

本書と、大内初夫『蕉門俳論集』（古典文庫395、昭和54年8月）  
に翻刻される『俳諧発句十六篇』『俳諧付句十四体』とを比較すると、  
語句等に多少の違いがある。とくに「付句十四体」には、例句や項  
目の順序に違いがあることが確認できる。

本書の巻末には、「正徳五末之冬」とあるが、『蕉門俳論集』に載  
る大内氏の「解題」によれば、秋月郷土館所蔵の「俳諧付句十四体」  
の一写本に「宝永六年初冬 又正徳五末冬改之百花堂宇鹿艸」と末  
尾にあるとのこと。これにより、大内氏は「付句十四体」を「宝永  
六年初選、正徳五年に再選」と推測されている。この大内氏の推測  
にしたがえば、本書に記された「正徳五末之冬」とは、原著の再選  
時の年記を写したものと考えられる。

本書には、他に奥書などではなく、書写者も不明である。しかし、  
やはり手銭記念館に所蔵される『俳諧根本式』の料紙は、本書の料  
紙と同じ（本書と同じ版木を用いて罫線を摺ったもの）で、筆跡も  
本書と同じと考えられる。

すなわち、本稿の最後に示した図版「15.『俳諧根本式』巻頭」

を参照すると、二オ一行目の「根本」の右横の匡郭が欠けているこ  
とをはじめ、罫線の欠損箇所が何箇所かあることが確認できる。こ  
れを、図版「11.『俳諧十五篇』巻頭」～「13.『俳諧十五篇』巻末」  
と比べると、その欠損が共通していることが明らかである。

そして、図版「15.『俳諧根本式』巻頭」の「一ウ」の左下方には、  
「冠李」の蔵書印が捺してある。つまり、『俳諧根本式』は、冠李（享  
保四年～寛政八年、三代目当主季硯の弟）が、おそらく自ら写して  
所蔵していたものであろうと推測される。とすれば、それと同じ罫  
紙を使用し、筆跡も共通する本書についても、おそらく冠李が書写  
して所持していたものと推測することが可能だろう。

なお、『蕉門俳諧大意 ふもとの塵』（本稿前章参照）には、「先  
師偃化の後、嵯峨の旅人去来、長崎にて門人の願ひによりて、附方  
十四体といふ物を書れたるも、彼十七ヶ條の名目を本として書れた  
るよし」（一六ウ）という一節がある。この「附方十四体」とは、  
大内氏『蕉門俳論集』に「俳諧付句十四体」の別系統の本文として  
翻刻されている「俳諧付方十四体」であると思われる。これは、現  
在では、やはり宇鹿の著書とされている。しかし、百蘿は、芭蕉の「付  
方十七ヶ條」を元にして、去来が書いたものだと考え、重んじてい  
たらしいことがわかる。

#### 〈書誌〉

書型……写本。半紙本一冊。

表紙……香色。縦二二・四厘×横一六・七厘。

題簽……左肩無辺、墨流し料紙。「俳諧十五篇 全」と墨書。

見返し……白紙。

本文……墨摺の罫紙を用いる。版式は、四周单边（内法、縦

一九・四厘×一三・三厘）、白口単白魚尾、每半葉一〇行。

これに一行一八字内外で本文を書写する。

字高……一九・四糧（本文二行目「和歌は……其言の」を計測）。

丁数……全四九丁（但し、遊紙二丁を含む。墨付き四二丁）。

備考……四二丁裏から四七丁裏までは罫紙が綴じられているが、とくに何も書かれないままになっている。

# 〔翻刻〕

俳諧十五篇 全

〔白紙〕

〔白紙〕

「（表紙、題簽紙）

「（見返し）

「（遊丁紙）

和歌は八雲八重垣より伝へ来、其言の葉の道より顕れぬれば、鬼神も感る正道なり。其位高き事、たとへば春は物見の興おし出して、衣冠の袖に芳野、初瀬の花をかさし、竜田の紅葉、娵捨の月には、立傘の露けき光りもさすか、此あきらか成る事、誰か仰かさらむや。俳諧は俗中の俗なる物にして、しかも自由を尽すものなり。鳥の囀いさきよき日は居なから一念の神に詣、星の明にさへ渡る夜は「（オ）三観の香をたきて、居なから見る所、思ふ所、いたらすといふ事なし。旅はことに風雅のやつれ多く、大服の静か成るあしたより、張笠、平包と目付けうかみ出て柴道、牛道、鯨の浜をも去嫌なくかけ渡りて、干麦の江に逗留をあかれ、うそはしり、七ころひ八おきの草枕には炮をとらへて暁を驚き、二見の浦のわすれがい、木曾の橡トナリの実に頭陀袋の底をふさげは、ちかつきに成て別る、案山子哉「（ウ）と、幽なる手ふりよりさひ出して、蝦夷、像瀉の花に月に汲茶をす、るも俳諧の手柄ならずや。哥は其位高きゆへに賤しきに捨らる、物多しところ。俳諧、其捨れるを一毫もあます事なし。又はいかひの高み、風流なからんや。士は戈をよこたへて句をおもひ、農は陌に

つくまひて、穂先に初鴈の声をおとす。工商またかくのことくなれば、なす処、思ふ所に俳諧の富る事、波湧かことし。只糸すしの「（オ）きら／＼とするものよりたよりて、一朝に優ス、一夕に病ス、あはしき心の山々、涼しきみね／＼はね越／＼千尺の碧雲に一瞬のねはりをはき捨／＼変行のひろみにおとり出すはなど、今日の自由なからむかし。

発句論 十六篇

附句論 十四体

不易流行

理屈

格式体

算用合

句ノ甘ミ

「（ウ）

句ノ苦ミ

句のねはり

常の形

算用合

取留ル場

あく場

ぬく場

未来を取場

手を放場

気色ノ一転

心の一転

以上十六篇

「（オ）

不易流行論

不易の句

疲すねもあればそ花の吉野山

筍やとり残されて風のおと

稲妻や闇のかた行五位の声

振売の鴈あはれ成恵比酒講

流行の句

藁の火てたはこむまかる花見かな

筍の名残や椀に節ひとつ

稲妻をかなぐり捨つ猿か城

夷講酢買に袴着せにけり

「（ウ）

不易流行の論、さま／＼有といへとも、遠々とき、高く解て、初心

の上に落かたまるへき事のみを本とし、或人の曰、不易流行のかたち、おのつからそなはり、男と成り女となるかことく、口より出るとひとしく千里をはしる物也。あなち不易流行を貴しとする物にあらずといへとも是又氣先計にして、不易流行の二つ全なし。此二つの物は、其形をも」<sup>（オ四）</sup>情をも分る物なれば、甲乙の論におよふ事なし。不易は千歳風流の不易也。行は時々<sup>（イマ）</sup>に流行する変化自在の形也。たとへは、不易は衣冠調へて勉か如く、流行は家にかへり、其衣冠をぬき捨て今日の日用をほしいま、にするかことし。

理屈

名月や寐ぬ所には門しめす

昼寐して手の動やむ團かな

井の水のあたゝかに成る寒サ哉

品川に富士の影なき汐干哉

発句は理の感なる物也。四時の告来れるものに逢ふて感ずる也。寐ぬ所には門しめすといひ、寐入ては手の動やむとのみいふは、たゞ日用の理屈にて、風雅の見入感なし。理は無尽の妙にして、つきる事あらんや。雲を種にとりて水に心を洗ひて、其あらはるゝ物の理なり。糸筋も感情を産出すもの」<sup>（オ五）</sup>、今日の俳諧なり。たとへは月花のやすらか成も、三ヶ月は細く、十五夜はまとか計といはんも、天地の理にして、作者はいづくにか有へき。平生理屈をいゑる人<sup>（イマ）</sup>をさへ、あの人は理屈人として余情を知る人の上に立事かたし。況や、風雅の道におゐて用二たゝんや。句は理屈もなし。ねはりもなく、金を打のべたることく言おろすへし。理になつむ事なかれとこそ。出家の出家くさく、豆麴のとふ」<sup>（ウ五）</sup>ふくさき、諺もあり。

格式体

紅梅は娘住する妻戸哉

五月雨や貌も枕も物の本

椀家具のたらぬ住居や菊の花  
音なしに木の葉の歩行社家の庭

凡句を思ふに十の八つ九つ、此体多<sup>シ</sup>。紅梅は娘の住所にこそとももひ、又寺貸座舗の取合にて幾度か発句に成たるへし。たとへは、むすめは」<sup>（オ六）</sup>嫁と替り、寺は庵とはかりたりとも、此廓の中にて句をひねる時は、一生此場に留りて、砂糖を蜜漬にするかことし。水も流れをとゝむれば濁りを生ず。俳諧の居処、猶知るへし。五月雨はさひしき物を求め、菊は隠逸の情に落入、木の葉は社家神主の住処にこそと趣向うかまは、千眼一到の格式なり。句は此体を父句として、母句を」<sup>（ウ六）</sup>求て産る句有。此場は幾度も味<sup>イ</sup>飽へし。

算用合

駒引の木曾や出らん三ヶの月

燕の居馴染空や郭公

此形、理屈に似てちかひ有。口当り発句にはあれとも、洒落の作者用ゆへき処ならず。只算用を合せたるまてなり。望月の頃こそ出へけれ。彼岸に渡りて、土持家作り」<sup>（オ七）</sup>、空まとひせぬ頃ならば、郭公の初音に寸尺合へし。此句打ひらめて言は、灌仏や七日過れば望月夜、といへる句の類成へし。

句之甘<sup>ミ</sup>

青風や蝶のうかるゝ長廊下

柴の戸やあつさを月に取かへす

名月やいかり打込む波のくま

時雨せぬ前とは違ふ紅葉哉

此場は甘<sup>ミ</sup>に喰付て水の味も」<sup>（ウ七）</sup>ある事を知らず。たとへは月明らかに空一点のちりもなく、海上にひとつの浪もなく、松柏の音、おのつから絶て、寂莫調ふたる場には、俳諧の知行すくなく、此場はいかい無きにはあらねと、句はきら／＼とする物をとらへて、一

氣を吐ものなれば、此地手掛りうすしといふへし。雲は月にむかひて厚く、海はさゝ波はしり渡りて、浦人の物よはい」(オ八)する声、村松の音にしかれて、肝煎の男、ちはむの上に胸服を着たるも、其場の俳諧と見へし。柴の戸の月に昼のあつさを取かえし、名月の一天に礎を入るを偶と見たるは、古人のよたれかすにして、又其後の古人のねふりたる処なり。かくいへはとて元日に火の物たち、布子を着て居風呂に入る物好きにはあらず。

句のねはり

「(ウハ)

楽天も我は恋しと花の陰

思ひ出や青麦くふて草枕

薺を今朝あさかをと見付たり

瓜取て心安さよ年の暮

花の陰に古人を恋しきといふは甘きを知りて作者も我の一字を入たる成へし。我の字、猶又ねはる也。貫之、業平は勿論、楽天も恋しといへる句ならば、我の字」(オ九)慢心のけんけといふへし。草枕は風雅の命なれば、善も悪も皆其日のはいかひ也。綾金鑰にやとりては、つかれたる瘦すねをあたゝめ一枚の菰をかつきては、目前の只ことをたのしむこそ、自由の場成へし。かくおもひ出れば、おのつから句のひかりにや、と置たる所おもひ出にはあらで、苦舗へつらひの五文字也。青麦くふて草枕と」(ウ九)はかりいは、おもひ出はおのつから句のひかりに有へし。又、薺をあたなりと見付たりといふ心のねはり也。風雅の野器にて、道を知れる人のたまさかにも言出すへき言の葉にあらず。多くは慈鎮、西行の歌にも知るへし。見解なるは、有へからず。年のくれは世をのかれたるも共に天情の氣につ、まれて、一夜のとしを重ぬる心遣ひにこそ、面白き風流」(オ一〇)もあるへけれ。瓜取て人やすしなと、志の我めきたる処、市中に隠れましき器也。いそかしき人にまされよ年の暮といへる面影こそな

つかしけれ。

常の形

元日や人の心も其通り

ひら／＼と扇をかけさす暑哉

鶏頭の花の盛りや八九月

よふ積た処はなきか雪丸け

「(ウ一〇)

常はことにして用ゆる時は句と成り、用ひされはあた事也。きせるのはちも百にましる時は錢壺文となれ共、錢はもとほねおりたる物也。此場に俳諧ありと思は、たとへ廿年の腸をつるやす共、砂をむして飯とするかことし。また、功を隠して愚に遊ふといふは、はるかに違有。此の境、まかふ人多し。

「(オ二)

只事発句の場

筍やこちの裏にも二三本

薺やこちの裏にも二ツ三ツ

植木やの自慢で見せるつゝし哉

売家の自慢で見せるつゝし哉

温冷時節の情にして、花と咲、葉と落るは、姿也。有情、非情、風声、水音も其感する処より歌と成り、発句となる、其感する処、花実濃薄の違ひあるへし」(ウ二)薺の二ツ三ツと見入たる薺の感也。筍の二三本といへるは、たゝことのみにして、筍の風流なし。植木屋の自慢は、世の中の常にして、風雅の見処なし。売家の方は志をかんすへし。

取る場

俎板に押直りたる時雨哉

俎板にたゝき付はや小夜時雨

卯の花に娘客する庵かな

卯のはなや娘の眉のか、はゆき

「(オ三)



句の動不動は物好の器量に有へし。時雨はあつさにもかわり、卯の花は紅梅山吹とも取合は、本情のにらみ処おろそかに成ゆへに、取留る事かたし。浜の真砂子の数くとは一色く理にわかれたるをいふならん。時雨の句は其場の観想なれば、仕立よふ有へし。卯の花の句は卯の花より産出したる娘にあら」(ウ三)す。娘より取合たる句也。たとへは、手先にてとり合するとも、言下しにて十か八つ、九つ取留<sup>ル</sup>物也。鳥も鳴くといへはあはれに、囀といへはいさきよきかたちあらむ。

あく場

ほと、きす鳴や湖水の笹濁

鳴ぬ夜はと人はいふ也郭公

手水鉢洗ひ流して草の花

手水鉢洗ひなしてつはの華

「(オ三)

五月雨の少し晴渡りて水の色笹濁たる湖水の気色、たとへ絵に書るほと、きすなりとも、啼へき場也。近年郭公の句あまた聞待れとも、大形は此句より孕出したる句多し。是、気色の頂上にして、一毫も残る物あるへきか。しかれ共、一段高き所より見下したる時は、此場十分過たる所と言へし。次のほと、きすは気色に力を求す、心に甘<sup>ミ</sup>を不」(ウ三)取、十を一二歩もかけたる処、句の高みといふへし。草の華は、少し手掛は取たれとも、十分の能場也。次の句は冬枯のかんくときび渡たる庭なんとに、手水鉢洗ひ流してといふ、つはの花のさひしきより花を見出したる処、百ばいして知るへし。

ぬく場

鶯も海向ひて鳴け須戸の里

鶯の海向ひて鳴く須戸の里

春風や広野にうてぬ雉子の声

春の野を唯一吞や雉子の声

「(オ四)

須戸といへは名処の上に立、うくひすは諸鳥のかしらに立。能場能物にて発句になす処手柄も有へし。然とも、初の句は、此須戸の里の鶯ならば海向ひて鳴けと、此方より下知したる句也。後の句は、其志をぬく。此里の鶯ならば海向ひて鳴けと下知」(ウ四)せんよりは、此里なる哉、鶯も海向ひてなくと、自然を感じ須戸に志を持せたる也。雉子の句も、後句其志をぬく。広き野にてはほろ、もうてす、せまき野にてはうてるなど、此方より情を付んよりは、只一吞にと一情をおし下したる処、一句のむらなき句作といふへし。

句の苦<sup>ミ</sup>

水茶屋の吞て戻るや春の雨

「(オ五)

親方に寺で逢たる暑かな

花の陰に腰掛なんと気色よく取并へ、茶釜を古きとして、朝かけより人待空のほろくんと降出せは、節角仕入たる茶もむた事と成、ちかつきの出家、又はそこの人にも吞せ、我も打のみ、今日は不仕合にて、茶道具荷ひ帰るさまを見入たる志の苦<sup>ミ</sup>といふへし。涼<sup>ミ</sup>の句は、主掛り、又は兄なんとに打掛りて、平生を律義に」(ウ五)勉たる男成へし。今日は、殊更暑きとて、半日の閑をぬすみ、心安き旦那寺へ行は、ふと親方の居て物くひ酒呑みせる処へ行掛り、俄にはつしも成らす、うずくとしはらく時を移すなど、一興の苦<sup>ミ</sup>といふへし。句は前後をはしるを変風の命とする也。

未来を取句

巢の雀隣合てやはつ桜

「(オ六)

尻飛ひに闇のいなこや穂の頭

千草万木枯れ尽したるより、おのか家造らんと、少し風よけしたる所に巢をくふたる雀なるへし。春も二月初かたより、左右の枯木打しらみて、見れる初桜の咲出したる也。是不求して自然の気色に合ふたる句也。惣て、句は、はつ桜と置て、何くんと相手を探、十に

八つ九つは句する事也。此はつ桜は、未来にして」(ウ六)、自然に取留たる気色也。いなこの句も、求ずして天然穂の頭と飛あたりたる句、理屈ぬきたる俳諧の地成るへし。

手を放場

松杉をほめてや風の薫る音

飛込んだまゝか都のほとゝきす

また冷ぬ瓦落けり寺の屋根

松風や軒をめぐりて秋くれぬ

此句評なし。味ひしるへし。

気色之句

白妙の月夜烏や花の奥

螢火や吹飛はされて鳩の闇

秋風や笥も来たりこなんたり

鳶の羽もさわらは雲の時雨口

同一転之句

山越に都を覗く雲雀かな

白雨や降そのふて雲のみね

夕貌やかいまかるほと秋は来ぬ

頭巾着て顔さし込や縄すたれ

心之句

蓬萊に聞はやい勢の初便

夏の夜や夜半に暮て町の音

文月や六日も常の夜には似す

着て立は夜の衾もなかりけり

同一転之句

角頭巾とちへ投ても花の春

涼みする中に見られて涼みけり

念頃に隣は光れ星の留守

藍つほに切れを失ふ寒さ哉

右十六篇は高名の作者、時にあやまれる句、又千眼一到の句、集々より引出して教とする処也。此一步より踏出さは、千里もあやまち有へからず。今時の俳諧、多は是等の変ある処を知らず。足本になつみ、或手前なしのめつた的にして、百発に一的する事なし。たとへは、たま／＼偶中あるとも、作者は夢うつゝのことにそあらむ。」(ウ八)句はた、此変を本として、時日の非成る事をおもふへし。

附句十四体

附句は見聞思の三つより別れて、千草万木鳥獸季節昔今の事を前句に對して産出せる物也。されは、蕉門のはいかひ、字眼、冬の日より改りて、ひさこ、あら野の間に掛渡る事、年久し。然れ共、」(オ九)問々附句理屈に落、又は俗談平話の化事に走りて、既に風雅の二字かすかなれば、元禄の初に一洗して、猿蓑集を作れり。深川の集、是による。此かたち、花を拾ひ、実を提りて、皮肉骨の三つを作る物也。其後、又新風を起こしたまふ。炭俵集也。有磯海、是による。此時、ねはり甘ミをはふき、能場を捨、工ミをぬき、多は「(ウ九)」事の場に俳諧の有事を見出して、不易に不背、流行に飛流するもの也。又、続猿みの集あり。是は、猶一転の変行にして、句に居て句を作らず、変の実、実の変よりならみ出せる物也。初心の為に其句をあけて、時々の変行を知しむるもの也。

俳諧時候之変

冬の日 あら野 ひさこ

ひとり世話やく寺のあと取

此里に古き玄蕃の名を伝へ

あやにくに煩ふ妹か夕ななめ

あの雲は誰か儚つゝむそ

秋の田を刈せぬ公事の長引て

さひくゝなから文字問に来る

理を推れたる秋の夕暮

ひやふたんの大<sup>サ</sup>五石計なり

冬の日

鶴見る窓に月幽なり

野水

風吹ぬ秋の日瓶に酒なき日

翁

秋の気色の畑見る客

我まゝにいつか此世を背くへき

火はしのはねて手のあつき也

隠す物見せよと人の立掛り

明日はかたきに首送りせむ

小三太に盃とらせ一うたひ

猿蓑集

芙蓉の花のはらくと散

吸物は先つてかされし水善寺

「(ウ二)

稲の葉のひの力なきかせ

発心のはしめに越る鈴鹿山

雨のやとりの無常迅速

昼ねふる青鷺の身の尊さよ

独直りし今朝の腹立

一時に二日の物もくふておく

冬空の荒に成たる北おろし

旅の馳走に有明し置

追立て早き御馬の力持

丁稚か荷ふ水こほしたり

此筋は銀も見知らす不自由さよ

只とひやふしに長き脇指

物おもひけるは忘れて休む日に

迎せはしき殿よりのふみ

炭俵集

風細ふ夜明烏の鳴渡り

家の流れたあとを見に行

鯨汁若ひものより能なりて

方くゝに十夜の内のかねの音

翁

「(ウ二)

「(オ二)

「(ウ二)

桐の木高く月さゆる也 野坡

はつち坊主を上へあからせ 利牛  
泣事のひそかに出来し浅ちふに 翁

椽はなに腫たる足をなけ出し  
鍋の鑄かけを念入て見る

預けたる味を取<sub>ニ</sub>やる向河岸  
ひたと言出す御袋の事

上置の干菜刻むもうはの空  
馬に出ぬ日は内て恋する

伐すかす椽と桧のすれ合て  
赤ひ小宮は新しきうち

天満の状を又わすれたり  
広袖を上<sub>ニ</sub>ひつはる船の者

続猿蓑集

有付て行出羽の庄内

此盆はまことの母のあと弔ひて

赤鶏頭を庭の正面

定らぬ娘の心とりしつめ

「(二三)

また沙汰なしに娘よろこふ  
とさくさと大卅日も四つのかね

はん僧はしる乗物の脇  
そくやふに長刀坂の冬のかせ

昼寐のくせを直しかねけり  
聾か来てにつともせつに物語

米搗もけふはよしとてかへす也  
から身て市の中をおし合ふ

浜出しの牛に俵を運ふ也  
馴ぬよめには隠す内證

鶏のあかるとやかて暮の月  
通りのなさに見せ立る秋

如此はいかひ俳姿の移替事は、時の氣運により、変に應し化に随ふもの也。此外門人の集凡貳百余艸に及ふといへとも、あるひは其撰者一己の理に落入、または見解して道をあやまるたくひ多し。句は、唯半熟の人には理を解し、其己より上の人には句をとくと知へし。

十四体

凡、附句はなぐる場有、掛る場あり。此二つの物は、前句の陰陽より見入、然も自由の立初るものなり。蕉門の教に、附句は無分別の地より前句を踏きたきて、邪正一毫の念も心頭に留す、只初念の氣

さきなり、と教るあり。是は、前句に引しはられて輪廻執着の場にふみ入たる作者のねはりを打払ふへき、仮の」(二六)教へなるへし。又、附句は一句に一句ならては附さるもの也、といへる有。是は、前句に差別なく、野卑<sup>ヤヒ</sup>虚々<sup>キョキョ</sup>の句に姿弁を付て、只口さばりのみ言似せたる偶中の作者をいましめたる物なれば、あなかちには非の論に及ふへからず。此十四体五品は、今の遊び所にして、自由転変の場也。句は落入へからず、理になつむ事なかれ。中古附句に、寄りと言、」(二六)運ひと言、風情と言、移りと言事なと有。是等は、皆句成ての名目なり。十四体五品は、前句定りて、おのつから心頭にかかむ。譬、さび、しほり、と言ふは、句外の妙にして、新古親疎の差別なし。句ひは情の余り也。さひはさひしきにもあらず、しほりはしほら敷にもあらず。

句の甘ミ

」(二七)

分別の外になき間をあき果て

二方を椽に野菊鶏頭

此句、世間をあきはて、といへる前句の実情を取りて、其表を引たる句也。附句は裏に志しを感じ、表にたゞ言をつくす物なれば、再吟して此句の甘き事をするへし。

千眼一到之句

二階へとつと上る小燈し

おしへしに仕切を渡す肥前船

」(二七)

前句のいそかしきを、祭の宵、盆、節季、又は問屋など、見入て、かく表におし当たる初念の句にして、千眼に背へからず。次句は物を拾ひ、ものを捨て、氣の風流を咄ものなれば、常の志に有へし。

附句の理屈

今年の土用あたまから照る

うゑ／＼の口にも入らぬさかなきれ

朱を赤きと言、雪を白きと言へる、さし」(二八)当りたる理屈にあらねと、土用の照り渡りたるに肴の無きとは勿論也。かゝる理屈の句、いにしへは初心の手掛りとも成り侍れと、今、蕉門に是を悪む事甚し。

能き場

敵寄るかと村まつ音

盃に母の涙をほしかねて

右、深川の席にして此句をもふけ給ひ、人々にのたまけるは、此打かためたる」(二八)形、附句の能き場也。句々に此所を案し侍らは、情細<sup>セ</sup>氣かた<sup>マ</sup>までて、終に心の規矩、廓を出へからず。たとひ句の志しは爰にありとも、句作はひろく和くへしとて、

有明になし打烏帽子着たり覺

と言へる句には定めたまふるよし、東武の門人、物語り侍る。

中より行場

」(二九)

行燈を二人の中に引向て

またはら／＼と霰ふり出す

此句は精神をとがめすして、只中より走りて句をならべたる物也。此かたち、世に多し。輕<sup>ミ</sup>と言、なぐりと言ふも、其寄所を知らされは句々に覺束なし。

一句の理屈

駕籠昇のこまひ旦那を悦ひて

一句手帳

」(二九)

笥の水を庵に取なり

天地の句

二月になれば桃の華咲く

作者の句

二月は旅て桃のはな見る



右、理屈、甘<sup>ミ</sup>、千眼一到は、初心の為に顕し、能き場、中より行場は、半熟の人の為にあらはし侍る。句は外物にあつからず、前句の精神をよく見留て自由を演る」(オ三)ものなりし。

句作

昏燭ともして見する足もと

背中ひねりて見する足もと

句作は、しめると、はしやくとなり。昏燭燈してといへるかたは、尋常の事にして、句に見へき力薄し。背中ひねりてといかむは、其場の俳諧有。或人、先達に此事を問。答て曰、句作はたくみを捨て、耳に立詞を求めず。唯、一下し」(ウ三)にいへるを上品とす。たとへは、手入し菊の咲て見事さ、と作れる句は、五文字の理屈あり。手入れぬ菊の咲て見事さよといはん。はかるへし。されは、句に千歳不易あり。一時流行あり。此句、又流行して、今是を思ふに、見事の二字、句中に甘<sup>ミ</sup>あるへし。

物数奇

二両の鯛をくさらかしけり

「(オ三)

くさるほと取れたる鯛のつかひもの

是等は物数奇の格にして、何れの句も、此風流より出侍る也。たとへは

死る合点で煩ふて居る

是、実情の句也。是を打返して、

死ぬ合点で煩ふて居る

と見入たる場も有ぬへし。此両句、又変なりと見出し侍らん人は、句々に手を放れたる作者成へし。惣而句作は前句を受侍らは、猶以一変に留る」(ウ三)へからず。

條々

- 一 附句は七情より発りて変実一転の差別有事。
  - 一 恋、旅、気色の句は、前句の馳走によるへき事。
  - 一 天象、時曇等は、力を入すして逃る事なけれ。
  - 一 都鄙、老若、貴賤等は、其品に」(オ三)落へからず。
  - 一 盆、歳暮、寒暑等は、其理に落へからず。
  - 一 附句に甘<sup>ミ</sup>有、仙眼一到の場あり、はまるへからず。
  - 一 附句は、前句の動不動を定て句をはかる事。
  - 一 附句の理屈、同じく手帳有、逃へし。
  - 一 物数奇は変を好むへからず。
  - 一 句に天地の句有、作者の句有、力を入へし。
  - 一 附句は、一二句も引たくりて、一定すへき事。
- 以上

「(ウ三)

星の光りに居る椽先き

見

峯の火のはつはと下る愛宕道

聞

此分て梅雨も上る海の音

鬼

旅にやる弟か事を泣はれて

神祇

里神楽鳴出す鶏を待合

尺教

目か明けは又題目を喝つ、

恋

二度逢ふて今年も暮し浮思ひ

無情

「(ウ三)

竈馬も皆死はて、かせの音

旅

五人前取集たる傘合羽

初心の句を案する、附句の理をぬき、甘<sub>ミ</sub>を払ひ、外物にかゝはらすとはかり案し入たる時は、前句の手柄を失ひ、いつれを取留る地なし。只、一氣走りてかく句と成事をしらしむるなり。

「(オ三四)

喜 或人言、見入成へし。

星の光に居る椽さき

白鷺に合たる鷹を安め置

苦 意気成へし。

星の光りも薄き椽さき

襟もとに腫たる乳を指出して

鈍 其場成へし。

星の光りをのそく椽先き

盃の二へん廻れはなま欠

利 情を押成へし。

ほしの光りのかゝる椽先

隠す事書て封する国便

「(ウ三四)

此四つの物にて前句を引おとすなり。執行せん人、工夫あるへし。

十四体名目

俳

観想

俗事

見入

乗

力を取句

人

かけ

場

打返場

意気

挫

情押句

なくなり

「(オ三五)

打返句

前句の力をぬきかゆる也。

観想

一氣の静る所より古今を感出<sub>ス</sub>。

人

人を取て今日を尽し、又物より人を見出す。

場

足下の事をあらはす。

「(ウ三五)

見入

かけより見入て句の体を定む。

乗

前句の氣をつれて句と成る。

力を取

前句の力に乗て直<sub>ニ</sub>品を尽くす。

意気

前脉のあらはるゝを取。

情押句

句の裏に情の隠れたるを押出<sub>ス</sub>。

「(オ三六)

俗言

産業得失、今日の事を取らへて句と成す也。

挫

前句を取りしきて、空に情を作る。

掛

第三の形にして両句合体す。

なくなり

千変万化に理の合ふへきを打なくる也。

「(ウ三六)

俳

前句の位を定而其俳を産出す。句成てひゝき分明也。

倂

肩とかるまで物おもふ秋  
折方の白紙匂ふ暮の月

観想

小笹の中に見入たる十五夜  
不立羽な鍵にて人に養はれ

人

相応な養子もあれとうか／＼と  
片言ませて公事の発反

見入

昼顔の花猶白しあらし山  
下部めしたる馬の片腹

乗

も、たちを皆いさき能取摘  
目面をも見えず霰ふる也

力を取匂

川渡る二布膝ふしかき上て  
いよ／＼兄はふつと道心

打返<sup>ス</sup>匂

三尺に余る刀をねち込て  
雫の酒にかほ赤みけり

意気

書付見せて一步手渡し  
面目になけれど今度死はくれ

場

蒲団の上に尼の気晴らし  
たもとより落たる物をいたゝきて

情押匂

何事も心に持たて打ころび  
又くわたひしと御袋の部屋

俗言

此度は伊勢の上下もよしにして  
残る片目の療治最中

挫

不斷に見ゆる銀の土器  
急度してこさる御寺は中氣にて

掛匂

有馬の人の判とりに来る  
祭<sup>山</sup>見る片手に蛸をはさまれて

なぐり

片腕と思ふ阿房は死果て

丸太のはし子二段引ッ切<sup>ル</sup>

俳、見入、乗<sup>リ</sup>、観想、情を押<sup>ス</sup>句、力を取る句は、実よりはしり、  
 (ウ三九) 意気、打返<sup>ス</sup>句、挫、人、場、俗言、なぐりは、句の虚より  
 走る也。此十四体は蕉門の教とする所也。今の作者、理屈、古<sup>ミ</sup>を  
 恐れて、不実単卑の句に形を附け、唯逃まはる句多し。又、口当り  
 きら／＼と言下せは、蕉門の変風也と言て、一己能心にも落さる句  
 共を、風情よし、のがれよしなど、いへり。風情といへる句を見る  
 に、大かた品<sup>(オ四)</sup>。位より出て前句に随ひ、理の見えさる附なり。  
 通れといへるは、唯中より走りたる也。風情といへるは、ひゞきの  
 軽き物にて、両句の間、手尔葉の能廻りまはるもの也。通れと言は、  
 なぐりの形にして、一筋の習ひ有へし。たとへ疎句一行のはしりと  
 いへ共、二三句も集て、又是をはなして句と成る事、蕉門の変行な  
 るへし。  
 「(ウ四二)」

五品

欺場 属挫

白粉の良も掛す頼たはこ

無分別から長刀も売る

飽場 属なぐり

浮恋の果はなけふし一ッ也

めしはかり喰ふゆきの静さ

苦 属打返<sup>ス</sup>

ほつこりと一ッ呑たる料理まへ

書付て来る店ちんの事

志

衣配り奥も勝手もとろ／＼と

「(オ四二)」

譬

朝茶をすゝる畳やの弟子

泥に凍のとくる汐かせ

こつ／＼と咳ほそふ弓ためて

五品は口決あり。是変風の涼しき所にして、未熟の作者争所にあら  
 す。十四体は肉をはしり、<sup>(ウ四)</sup>五品は骨をはしる。句は一気のま  
 ろひ出たる物なれば、まとか成時は、乾坤の間にみちて、月を思ひ、  
 ほしを思ふ。とがれる時は、花鳥人情に入て、虚実観苦の中を走る。  
 附句は、只前句をふみはつして、きら／＼とする物に婚して句と成  
 ると知るへし。

正徳五末之冬

(白紙)

(白紙)

(白紙)

(白紙)

(裏表紙)

「(オ四二)」

「(ウ四二)」

「(四三七オ)」

「(遊紙)」

「(裏表紙)」

〈付記〉

本稿をなすにあたり、手錢家の皆様には特段のお世話に預かりま  
 した。また、手錢記念館の佐々木杏里様には、細部にわたり懇切な  
 ご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

本稿は、拙稿「季硯句集『松葉日記』—手錢記念館所蔵俳諧資料(一)

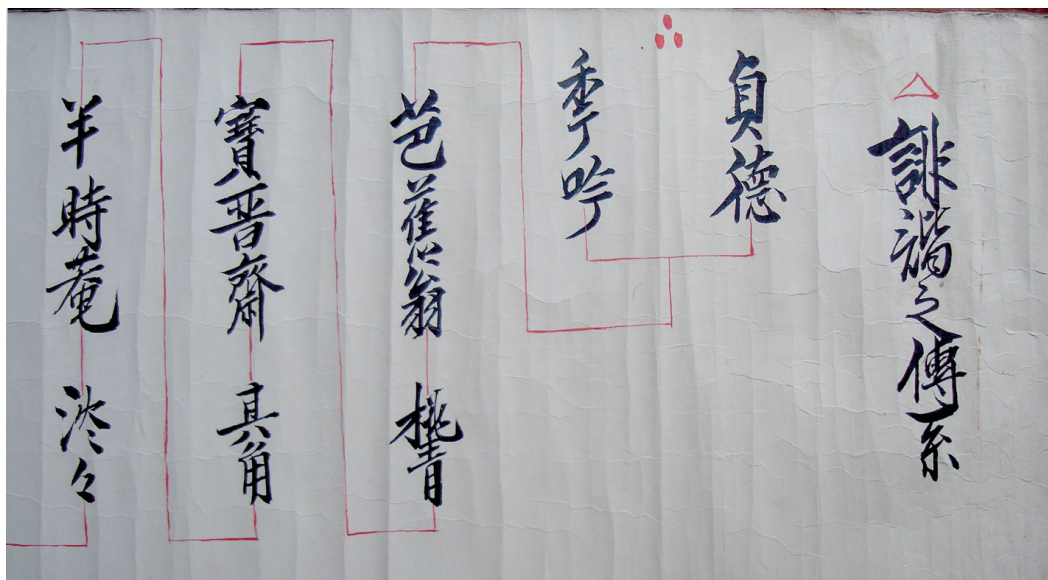
—」(『山陰研究』第六号、平成25年12月、島根大学法文学部山陰研  
 究センター)、同「翻刻・手錢記念館所蔵俳諧伝書(一)—手錢記

念館所蔵俳諧資料(二)―『湘北紀要』三十五号、平成26年3月、湘北短期大学)、同「百蘿追善集『あきのせみ』―手錢記念館所蔵俳諧資料(三)―」(『山陰研究』第七号、平成26年12月、島根大学法文学部山陰研究センター)、同「翻刻・手錢記念館所蔵俳諧伝書(二)―手錢記念館所蔵俳諧資料(四)―」(『湘北紀要』三十六号、平成27年3月、湘北短期大学)、同「衝冠斎有秀追善集『追善華譽粟』―手錢記念館所蔵俳諧資料(五)―」(『山陰研究』第八号、平成27年12月、島根大学法文学部山陰研究センター)に続くものである。

本稿は、島根大学法文学部山陰研究センター山陰研究プロジェクト「山陰地域文学関係資料の公開に関するプロジェクト」(二〇一三～二〇一五年度、代表・野本瑠美)、国文学研究資料館基幹研究「近世における蔵書形成と文芸享受」(代表・大高洋司)、科学研究費補助金(基盤研究(C))「人を結びつける文化」としての俳諧研究」(研究課題番号26370259)(代表・伊藤善隆)の研究成果の一部である。

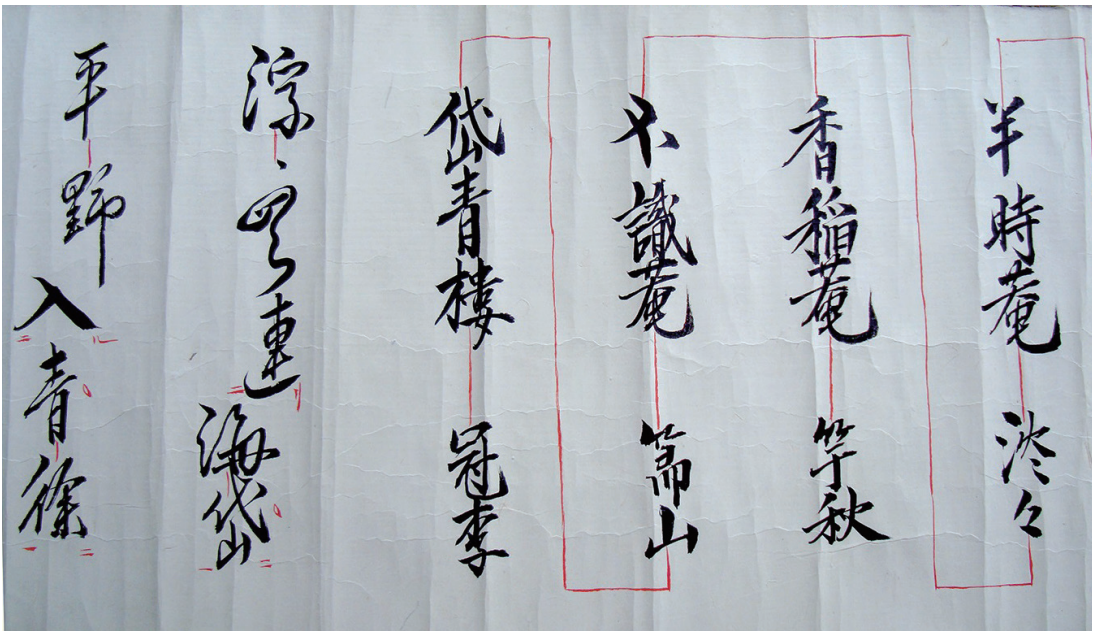
〈図版〉

1. 「誹諧之伝系」伝系(巻頭)





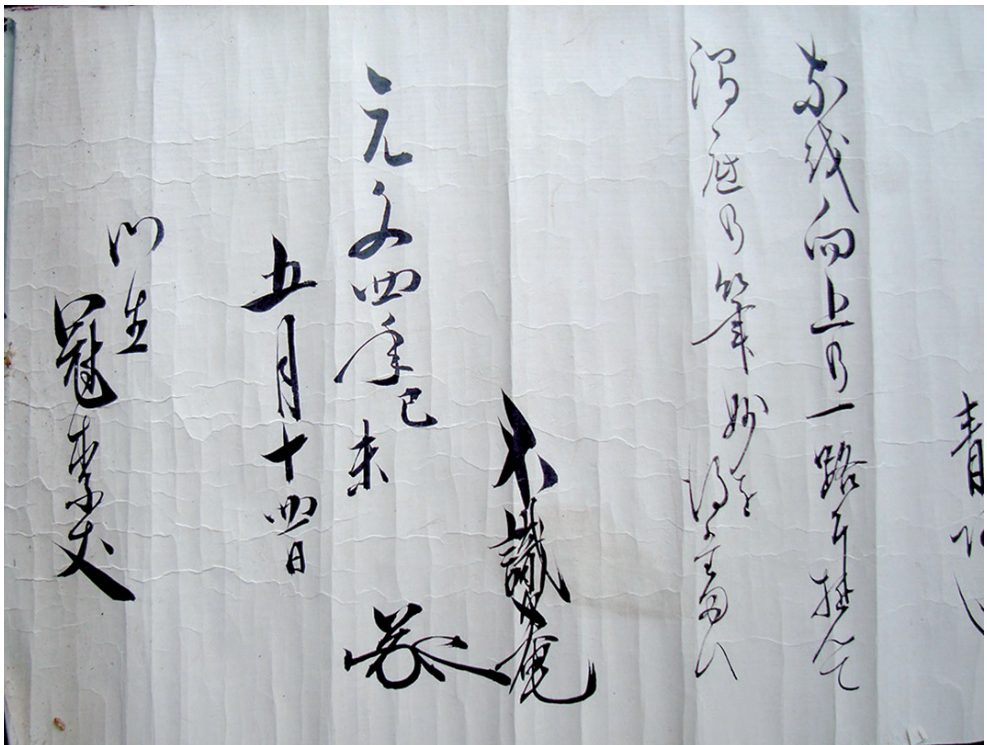
2. 『俳諧之伝系』伝系・対聯



3. 『俳諧之伝系』発句・署名



4. 『誹諧之伝系』署名・宛名(巻末)



5. 『蕉門誹諧大意 ふもとの塵』表紙





6. 『蕉門俳諧大意 ふもとの塵』 巻頭（遊紙ウ・一才）

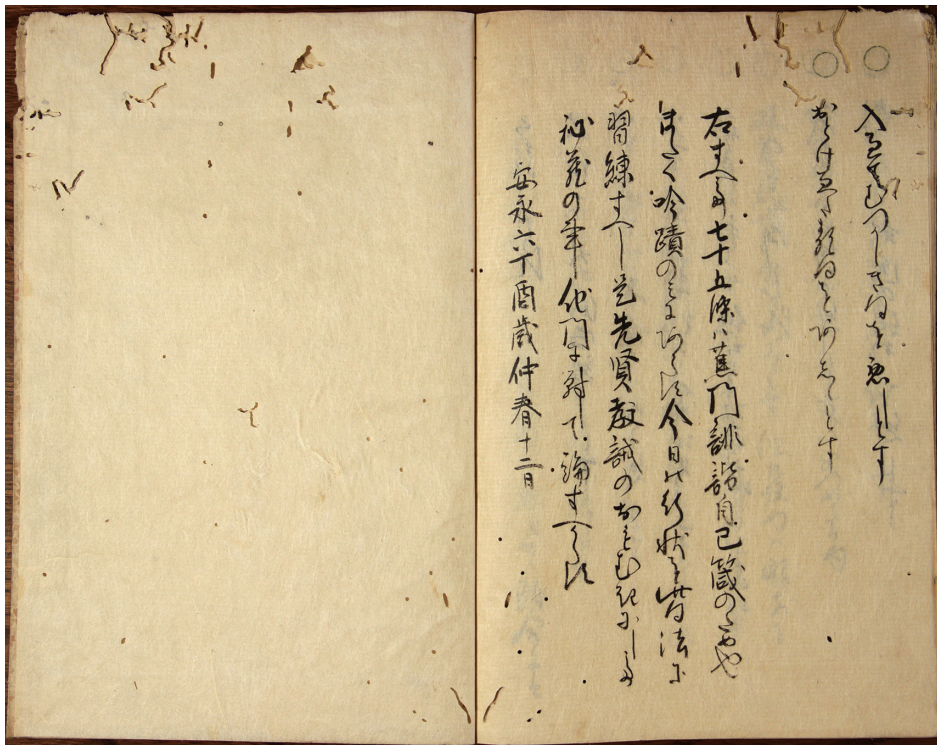
粵子蕉門に学友ありて、  
 二見以て不量なる幼少の頃、  
 芭蕉翁の影を、  
 冥助とて、千里に及ぶ一簣を、  
 山と一塵と、いふれども、  
 やじと、紙や、いふれども、  
 蕉門の俳諧、  
 芭蕉翁の影を、  
 冥助とて、千里に及ぶ一簣を、  
 山と一塵と、いふれども、  
 やじと、紙や、いふれども、  
 蕉門の俳諧、

7. 『蕉門俳諧大意 ふもとの塵』（二ウ・三才）

吾子、同時の人あり、  
 蕉門の俳諧、  
 芭蕉翁の影を、  
 冥助とて、千里に及ぶ一簣を、  
 山と一塵と、いふれども、  
 やじと、紙や、いふれども、  
 蕉門の俳諧、  
 芭蕉翁の影を、  
 冥助とて、千里に及ぶ一簣を、  
 山と一塵と、いふれども、  
 やじと、紙や、いふれども、  
 蕉門の俳諧、



8. 『蕉門俳諧大意 ふもとの塵』巻末(二二ウ・遊紙才)



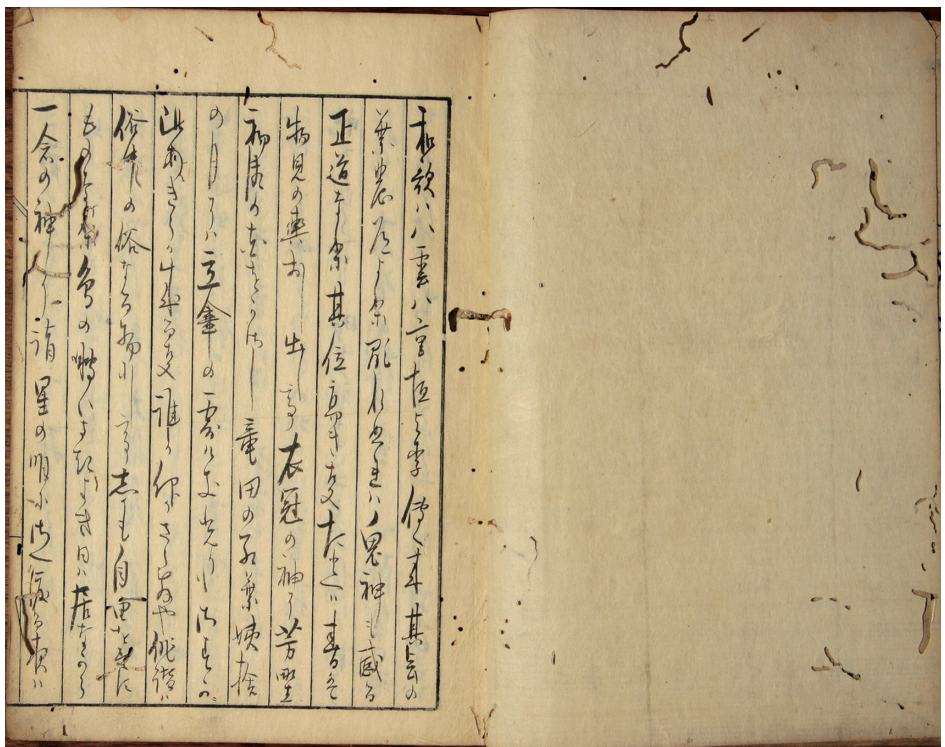
9. 『蕉門俳諧大意 ふもとの塵』裏表紙



10. 『俳諧十五篇』表紙

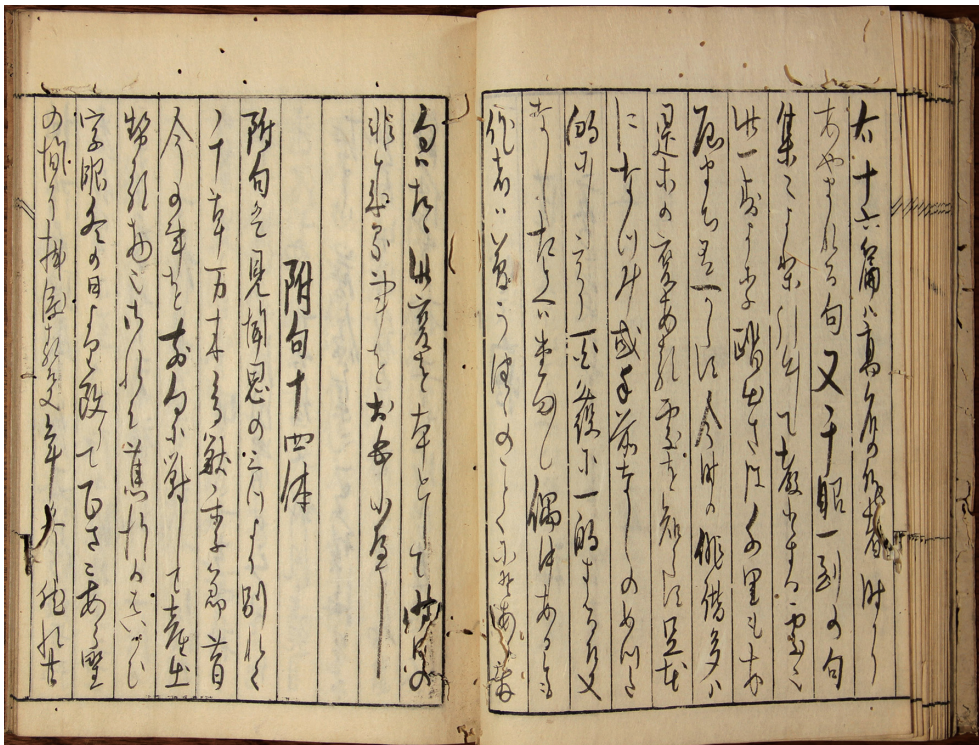


11. 『俳諧十五篇』巻頭（遊紙ウ・一才）





12 『俳諧十五篇』(一八ウ・一九才)



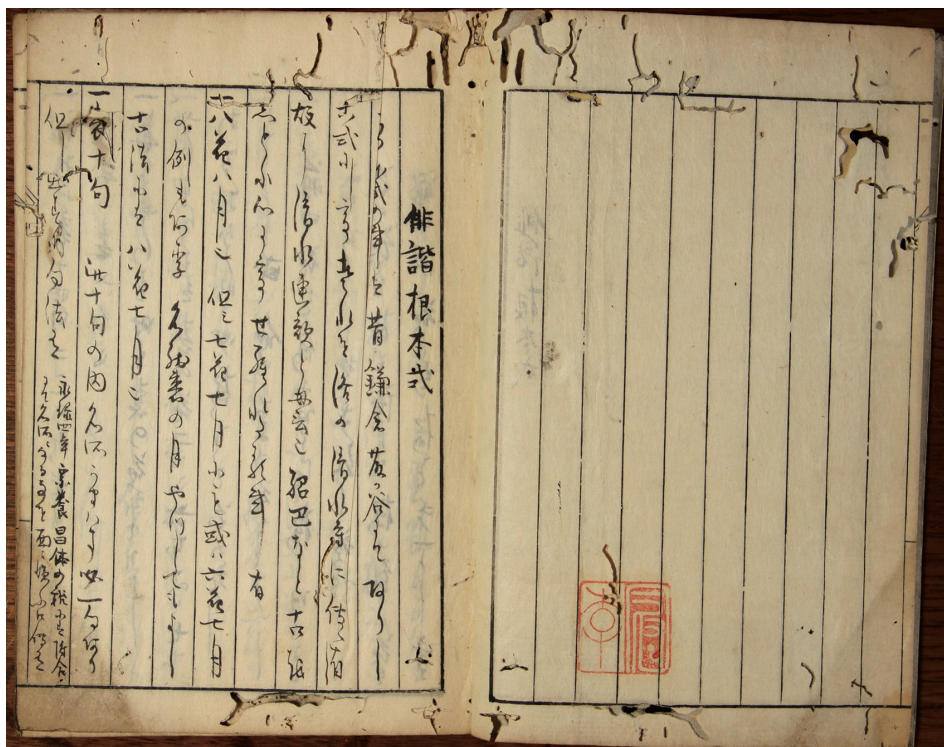
13 『俳諧十五篇』卷末(四一ウ・四二才)







14 『俳諧十五篇』裏表紙



15 『俳諧根本式』巻頭（ウ・ニ才）冠李の蔵書印と匡郭